

Title	穂積文雄著 英国産業革命史の一断面：ラダイツの研究
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.2 (1957. 2) ,p.139(67)- 142(70)
JaLC DOI	10.14991/001.19570201-0067
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570201-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

理由がある。しかしながら、小島氏のような交易条件の統計的事實を對象とするならば、貿易構造の變化という問題と結びつけざるを得ないのは當然である。そこに小島氏の交易条件論の新しい展開の道があつたともい得る。しかし、それだけに渡邊太郎氏の「小島氏が自説を立證するために提出している幾つかの資料はいずれも循環的なものであつて長期的なものではない」という批判を生む餘地をもつこととなる。第三に篠原氏が加工貿易に簡単に長期的交易条件の不利化傾向を結びつけたことは、價格效果から生産水準と所得水準の乖離を説明することを容易にしたけれども、それだけに小島氏の産業構造と貿易構成變動論からの或は綿織物工業の分析もこの批判を許すこととなつたものである。

まだこの兩者は比較するためには、交易条件の不利化と國際收支の問題にふれなければならないが、しかし現に建元・渡邊兩氏の論評もあり詳しく對照されていることでもあるので割愛した。まさに篠原氏が古典的な體系の美しさを示すとすれば、小島氏は改新を交えた精緻さを示すものであつたことを記し、この展望の筆をとめたい。

月刊 三色旗 二月號

- 働く青少年のこと……………小林澄兄
- 皮 肉……………近山金次
- 随 中津の舊宅……………金原賢之助
- 老人の幸福のために……………寺尾琢磨
- 人権思想と福祉國家(下)……………藤原守胤
- 戦後の日本經濟と中小企業問題(八)……………伊東岱吉
- ドイツ文學道しるべ……………成瀬無極
- 武家文書雜觀……………伊木壽一
- パッサリ以前・西洋音樂の自立……………村田武雄

—音樂講座(二)—

◆定價一部三〇圓・一年三六〇圓・書店へ直接御申込下さい。

東京都高輪局 慶 應 通 信
三田豊岡町八

(振替東京一五五四七番)

書評及び紹介

穂積文雄著

『英國産業革命史の一断面』

—ラダイツの研究—

「産業革命について、充分要領よく描こうとすると、そのひとは容易ならぬジレンマにぶつかつて、その野心をくじかれる」と、モリス・ドップはその大著「資本主義發展の研究」のなかで述べているが、まことに膨大な資料を前にして、ひたすら自己の才能の乏しさを嘆くのは、社會史の研究に没頭する者の常であらう。産業革命は、イギリス社會經濟史や労働運動史の研究者にとつては、まこと北海に悠々と浮游する氷山のように雄大であり、近よりがたいものを秘めているようにさえ感じられる。

しかしながら、この大きな事件の真相をときあかし、その歴史的な意義をあきらかにしようとして、わが國にも多くの人々によつて、數多くの貴重な努力が拂われてきた。上田貞次郎博士や野村兼太郎博士の先驅的な業績はもとより、大塚久雄教授や、小松芳喬教授、そして五島茂教授の著作は、わが國における産業革命史の研究にたいする大きな貢献であつたことはいふまでもない。とくに五島教授の著作、「イギリス産業革命社會史研究——Dorchester Labourers, 1834—1840」事件の研究——」は、原資料をもととして

書評及び紹介

まとめられ、産業革命にかんする平面的な敘述に慣れていたわれわれにたいして、特殊な一事件の徹底的な研究という點で大きな刺激をあたえた。わたくしは、かつてこの書を讀んで大きな感銘をうけたが、今また穂積教授の貴重な著作を手にすることができたことは、大きな喜びである。

(1) Maurice Dobb: Studies in the Development of Capitalism, 1946. 邦譯Ⅱ、第七章、産業革命と十九世紀參照。

II

穂積教授は、英國産業革命史の一断面と題するこの書の副題として、「ラダイツの研究」と書いているように、一八一一年ノッチンガム地方におこつた機械破壊運動をはじめとして、ランカシャーおよびヨークシャーにまで發展したこの大規模な労働者の運動を、ハモンド夫妻の「熟練労働者」、フランク・ピールの「ラダイツの蜂起」や、その他の多くの資料を引用しつつその真相をきわめようとして、研究を展開しておられる。

イギリス労働運動史の研究に志してより日浅い筆者が、この研究を批判することはあまりにも僭越であるかもしれない。ただわたくしはこの著作を紹介しつつ、あわせてラダイツ運動のイギリス労働運動史における意義についての私見をのべてみたいと考へる。

著者はその序文において、つぎのように言つてゐる。「本書においてわたくしは、ラダイツを一つの社會事象とみ、一體としてとりあつかうことをこころみた。そしてそれをなすにあたり、わたくしは、できるかぎり、資料をみずからかたらしめんとつとめた。本書

六七 (一三九)

が引用文をもつてみたされているのは、そのためである。わたくしの役割は、いわば映畫製作におけるプロデューサー乃至監督のそれに比しようか」と。著者の言葉のとおり、資料を精密に検討し、この運動の發展のあとを、きわめてドラマティックに叙述している。すなわち、プロローグ、第一章發生、第二章組織、第三章行動、第四章對策、第五章終結、エピローグである。プロローグにおいて著者は、ラダイツ運動を生み出した社會的背景として、産業革命を描いている。綿紡績業にはじまる近代的大工業によつてもたらされた生産力の飛躍的な發展は、家内手工業者から生産手段をうばつて賃金労働者の地位に轉落させ、機械のために職を奪われた紡績工たちは、この新發明の機械を憎むあまり、破壊的な行動に出たということ、つまり、ラダイツ運動以前にも機械の破壊運動は古くから存在したという事實を、マルクス、マントウをしてハモンド夫妻の說を引用しつつのべ、またマルクスやカンニンガムをしてハモンド夫妻のラダイツ運動にたいする見解に、疑問を投じている。著者の主な主張は、ラダイツの眞の姿をとらえるためには、この運動を、ノッチンガム・ラダイツ、ランカシャー・ラダイツ、ヨークシャー・ラダイツとわけるハモンド夫妻の見解は、不適當ではないかということである。

著者によれば、「すこしくちいってラダイツを説く者は、たいしていそうしているようである。なるほどそうすれば個々の事實を究明するには、都合がよいであろう。しかしながら、その場合、全體としてのラダイツの姿が見失われはしないであろうか。すくなくともそれが稀薄となるのをまぬがれぬのではないか。わたくしは、そ

發生を機械への憎惡呪詛からきりはなしてかんがえることはできない。けだし、この地方は綿業地帯である。だから、この地方で破壊の對象となつたのは、主として力織機であつた……」

「しかしながら、ノッチンガムのラダイツの場合は、すこしく事情がことなる。ここでラダイツが發生したのは、つぎの事情による。ここは靴下、レース編業の地帯である。普通の靴下編機はせまい機械であるが、それとらんで、多數の廣幅機が、かなり長い間すえつけられていた。これは長靴下とツイルスという變り靴下を製造するためのものであつた。ところがこの二つの品の需要がおちてしまつた。長靴下は大陸で賣れなくなり、變り靴下は流行がすたれたのである。しかるにこれを廢棄しないで、これでつくつたものを適當に切斷して、手袋や半靴下とすることをはじめた……このあたらしい方法の結果、市場は不良粗悪品でうずまり、良心的な生産者は價格をひき下げるか、飢えるのか、岐路に立たされた。ノッチンガムの労働者の怒りがこのカット・アップにたいして爆發した。かくてかかる悪徳業者ならびに廣幅機にたいする攻撃がはじまつた。これがラダイツのそもその發端であつた」と。

以上のように、ラダイツ運動は、賃金低下の傾向にたいする労働者たちの怒りが爆發したものであつたことは言うまでもない。これが、イギリス労働組合運動史の上にしめる重要性について、シドニー・ウェップはつぎのように言っている。「これらの暴動のうちで、もつとも有名なものは、それについて實際にはほとんど知られていないけれども、一八一一年から一八一二年にかけてのラダイツの蜂起であつた。このとき、ある種の組織のもとに活躍しながら、筋肉

れをおそれる」と。このような立場から、筆者は、このラダイツ運動のなかに、イギリス産業革命史の大きな特徴を見出そうとして努力しておられるようである。

しばしば指摘されるように、産業革命の歴史は、イギリス資本主義の確立をとおして、労働者階級と資本家階級の對立をはげしくしていくた過程であり、労働者階級の窮乏化が、相對的にも絶對的にもおしすすめられていき、反面、資本が急速に蓄積されていくた過程であつた。労働者階級の窮乏化がひどくなつて耐えがたいほどになり、一方、團結禁止法によつて労働者の團結がきびしく禁ぜられたとき、ウェップのいわゆる「生存のための闘争」(struggle for existence)がはじまつたのである。

生存のための闘争、それはしばしば宣誓によつて、同志を裏切つた場合には、残酷な私刑を加えられることを覺悟して、非法な結社を組織した十九世紀初頭の労働者たちのそれであつて、ラダイツ運動はその代表的なものである。しかしながらこの運動は、イギリス労働運動史上に、どのような意義をもっているであろうか。著者は、歴大な資料を駆使されながら、この運動の發端についてふれておられるが、著者の說にふれつつ、以下、わたくしの意見をのべてみたいと思う。

三

まず第一に、ラダイツ運動は、どのような性格のものであつたか。これについて著者は、つぎのように適切に指摘される。

「ランカシャーやチェンシャーにおいてもそうである。ラダイツの

労働者の暴動的な群集が、織物機械を破壊し、時として工場をうちこわしまつた。これが労働組合運動と、どの程度まで直接の關係をもつていたかは、未刊行の證據を、徹底的に研究するまでは、はつきりしないようである」と。ウェップ夫妻は、ラダイツ運動について比較的くわしくのべているが、近代的な労働組合運動と見なししていないようである。

またG・D・H・コールは、そのイギリス労働運動史のなかで、「ラダイツ運動は、ミッドからランカシャーとヨークシャーに擴がり、この最初の運動が消滅した後、しばらくの間機械にたいする組織的な襲撃はすべてこの名前で呼ばれた。しかし木綿工業と羊毛工業においては、この類にさわる機械は、多くの工場の中で、直接雇用主の保護のもとにおかれていたから、労働者がこの堅固に防衛されている機械を襲撃したとき、運動はむずかしくなり、一層暴力的な騒ぎをひきおこした。ランカシャーでは、機械破壊しとラダイツ運動は、偶發的な事件か、ストライキの附隨行爲、または極度の困窮の時に自然におこつた爆發上のものには決してならなかつた」とのべている。そして注目すべきことは、アレン・ハットは、そのイギリス労働運動史のなかで、このラダイツ運動について、ほとんどふれていないことである。

大體において労働組合運動の研究たちは、この運動の重要性について充分認識していたけれども、これを労働組合運動の歴史の上で、大きくとりあつかつていない。何故であろうか。一言で言えれば、それはひろい意味での労働運動ではあつても、労働組合運動ではなかつたからであろう。それは労働組合運動以前のものであつた

のではないだろうか。

産業革命史という大きな歴史的現象のなかで、このラディック運動は、ひとつの高い峰を形づくっている。この峰は労働組合運動という延々として連なる山脈とは別の性格をもっている。これは産業革命がもたらしたいろいろな結果を集約的に表現したものであつて、その結果にたいする労働者たちの抵抗のしかたにおいて永續的組織的であるよりは、むしろ絶望的非連續的であつた。ここに、ラディック運動を労働組合運動から本質的に區別する原因があつた。

ラディック運動と労働組合運動についての關係については、ウェット夫妻のいうように、必ずしも明らかにされていないが、歴史的な事實としての研究も、従来まで充分ではなかつた。いまここに穂積教授によつて、このような良心的な研究がなされたことは、イギリス社會史の研究に志すわれわれにとつて、大きな喜びである。後學のひとりとして、わたくしは、穂積教授のこの御著作が、更に大規模な産業革命史研究のための第一歩となることを確信するものである。

(A 5 判、二九六頁、四八〇圓、有斐閣刊)——一九五六、一〇、二四——
(1) S. and B. Webb; History of Trade Unionism, 1920, pp. 87—88.

(2) G. D. H. Cole; A Short History of the British Working-Class Movement, 1789—1947, p. 42.

(3) Allen Hutt; British Trade Unionism—A Short History, 1952.

(飯田 鼎)

章この本をよむ人のために、の中では、「戦後新しい条件のもとで日本の統計學界が取り組んだ大きなテーマの一つは、いわゆる推計學の思想をめぐつての論争であつた。この論争は、日本の統計學が科學として確立し、現實の課題から遅れをとりもどすために、どうしても通過しなければならぬ關門であつた。そしてたしかにこの論争は、わが統計學にいくたの理論的反省と收穫をもたらした。しかし、事態を冷静に見きわめるなら、中學校や高等學校の教育課程で統計學があいかわらず數學の一部門として扱われている事實に象徴されるとおり、統計學は社會科學ではなく、自然現象も社會現象をも共通に研究の對象とする『普通の科學』であるかのごとき見解がいまなお支配的なのである。」と述べられ、統計學は社會科學であるとされている。以下、まず第一章統計の展開で、世界統計學の發展、とくに日本における統計學の歩みを簡単にふりかえり、私たちが繼承すべき統計學の積極的な遺産をみきわめる。つぎに第二章ソヴェト統計學論争の經過と意義で、一九四八年に開始されたソヴェト統計學論争の經過と意義を明らかにし、その過程における日本の統計學界への影響についてもできるかぎりふれる。さらに第三章統計學の諸問題に關する科學會議の検討その一と、第四章その二で一九五四年の科學會議の内容を詳しく分析し、その成果を検討する。そして、最後に第五章統計學の當面する問題で、戦後日本の統計學の分野におけるいくつかの問題に検討を加え、今後、統計學が果さなければならぬ課題について私たちの見解を述べる、となる。第一章では通常の統計學の歴史、コンリンドグリアッヘンワールからクニース、グラント、ケトレーの線と、ラプラス、ゴッ

書評及び紹介

有澤廣巳編

『統計學の對象と方法』

——ソヴェト統計學論争の紹介と検討——

本書は統計學の對象と方法についてのソ連科學會議の議事録を中心として述べられているが、その考え方は序文の最初に見られる。「戦後わが國の統計學界にはみずから推計學と稱する数理統計學が導入され、それが新しい統計學、法則發見的な學問としての統計學をもつて自任し、従来の統計學、とくに社會統計學をたんなる記述的統計學として貶下するにおよんで、社會科學としての統計學に大きな混亂が起つた。それは推計學論争の側における思いあがつたゆきすぎがあつたことにもよるが、しかしまた、いずれは一度、起るべき問題であつたともいえるのである。なぜなら一九二〇年代における統計學論争、實質科學としての統計學が形式的科學としての統計學かの論争はいちおう後者の説が支持されるという形で終つたが、それにしても、統計學の對象と方法についての検討は十分なままに残されたからである。それゆえ、方法的學問としての統計學がそれとしていつそう押しすすめられ、いつそう形式化・一般化することになつたとき、社會統計學は必然的に自己の對象と方法について再検討をせられる運命にあつたといえるのである。たまたま推計學の擡頭と社會統計學にたいするそのゆきすぎた攻撃とは、社會統計學の自己吟味への契機をつくりだしたのである。」ここでは社會統計學と数理統計學(推計學)と二つに分けられている。序

ルトン、ピアソン、R・A・フィッシャー、ユルモゴロフ、ホーヴェルモ、ケープマンズの線とが述べられ、ドイツ社會統計學派の大成者としてマイヤーをあげている。「マイヤーは述べている。『私は統計科學をば、人間の社會生活における事實的事象とそれより生ずる法則とを數量的大量觀察にもつて組織的に説明し論究するものと定義したいと思う』。ここで統計學は一個の社會科學であり、『數と量とに把握されうる人間社會の特性を探究し、社會生活の合法則性を確證する科學的手段』であると規定されたのである。一方数理統計學は、『ドイツ社會統計學派と異なり、社會現象も自然現象と同じ方法で分析できると考へる立場がある。……科學の使命は現象の記述と豫測にある、と考へられている。その立場にたつかぎり、統計學はたんなる分析手段にすぎない。經濟學においても、物理學においても、同じようにそこでつくりあげられた方法を驅使した『統計的分析』を行うことができるのである。だから統計學の問題は、資料の分析要具を數學的にみきあげることと歸着する』——「統計學はプラグマティズムにもとづく普遍的科學として完全な計量技術としてあらわれる。すなわち統計學はあたえられた調査目的と限られた費用・時間・勞力の範圍内で、どのようなにして精度の高い統計を得るか、そこからあたえられた政策などの効果をどう測定するかという問題に歸着してしまふ。これは統計作成者の統計學、官廳統計作成法ではありえても、けつして歴史的・社會的產物たる統計そのものを科學的に解明できるものではない。このような知識は統計學のために有用ではありえても、それを統計學そのものに切りかえることはできない。以上統計學には

七一 (一四三)